

入選

うちの川を守るために

徳島県 神山町神山中学校 三年 中南 礼

僕の家は徳島県神山町の山あいにある。中学校までは片道二キロ。重いリュックを背負って歩くこの道が、僕は結構好きだ。家を出てすぐ支流の上角谷川に沿って歩き、学校手前の大きな橋で本流の鮎喰川を渡る。二つの川の様子を毎日眺めて歩くのが日課だ。そして夏は家の前の川へ飛び込み、部活で熱くなった体を冷やすのが一番の楽しみだ。泥だらけのユニフォームは、洗濯機に入れる前に自分で下洗いをするのが約束だ。たっぷりの水で泥を落とし、真っ白に洗えるのが当たり前のことだった。でも、その当たり前が少しずつ変わっていった。去年の秋から雨が少なく、この冬は雪も少なかった。三月になっても雨は降らず、上角谷川の水はどんどん細くなり、乾いた川底の石がむき出しになってきた。

「このまま雨が降らなかつたら、川はどうなるんだろう」と心配になった。そんな時、防災無線が流れた。母と町のホームページを確認すると、「水不足で困っている人のために神山温泉を無料開放する」という知らせが出ていた。町内に渇水に困る人がいる事実には驚いた僕は、神山の水の仕組みを調べてみることにした。

分かったのは、神山の水道の多くが山の湧き水や地下水を使った「簡易水道」に支えられているということだ。遠くの大きなダムからではなく、神山の山そのものが水を作っている。さらに三割の家では、井戸を掘ったり山の水を直接引いたりして生活していることも知った。この話をする時、父が昔の話を教えてくれた。「じいちゃんから聞いた話だけど、昔は山から切り出した丸太を組んで流す『筏流し』ができるくらい水が多かったらしい。父さんの子どもころは、飛び込んで遊べる深い『淵』があちこちにあったけど、それが知らず知らずのうちに砂が流れ込み、川床が上がってしまった。遊び場が埋まっていくのを、じいちゃんは寂しそうに見ていたよ。」

調べてみると、山の手入れ不足で土が固くなると、雨水がたまらずに

逃げてしまいうらしい。また、砂防ダムが砂を止めたことも、かえって川底を浅くする原因の一つだと分かった。僕たちの命を災害から守るための施設が川の姿を変えてしまったことを知り、複雑な気持ちになった。僕たちの暮らしは、自然と人工の施設のどちらにも支えられているのだと改めて気づかされた。

そう思った時、一年前、総合的な学習の時間に林業体験に行ったことを思い出した。山の斜面に穴を掘り、広葉樹の苗を植える。当時はただの体験だと思っていたが、あれは緑のダムを作り、水を蓄える力を取り戻すための大切な仕事だったと気づいた。

山を元気にするためにあの時植えた苗木は、川のせせらぎを守り、巡り巡って僕のユニフォームを洗う水にもつながっていた。僕たちの暮らしは、大きな水のリサイクルの中にあるんだと、やっと分かった気がした。自分の家が渇水しなかったからといって、この水不足は他人事ではない。町が動き、みんなで助け合えるのは神山の温かさだ。でも、ただ助けを待つのではなく、祖父たちが大切にしてきた豊かな川を僕たちの代でも守っていくために、自分自身が「この川の当事者」になることが一番大事なのだと思う。

もうすぐ高校生になる僕にできることは、蛇口の向こう側にある山の自然と、それを守っている人の努力を忘れないことだ。洗剤を使わずに自然のようにし、川の変化に気づける目を持つこと。そして、町でたびたび開催される樹種転換のための植樹体験にも積極的に参加したい。そこで学んだ山の役割を周囲に伝えることも、僕にできる大切な役目だ。これから神山のきれいな水を維持していく意識を持ち、「うちの川」を未来へつなぐ一歩を続けていこうと思う。